金田一春彦
■
日本語セミナー
五

日本語のあゆみ

筑摩書房

金田一春彦　日本語セミナー五
日本語のあゆみ
昭和五十八年八月二十四日　初版第一刷発行

著者　金田一春彦
発行者　布川角左衛門
発行所　東京都千代田区神田小川町二ノ八
株式会社　筑摩書房
電話　東京（二九二）七六三一（営業）
東京（二九四）六七二一（編集）
振替　東京六―四一二三番

印刷・株式会社厚徳社
製本・株式会社永興舎

0380-76805-4604　Printed in Japan

乱丁・落丁本の場合は，ご面倒ですが小社読者係宛に
ご送付下さい．送料小社負担にてお取替えいたします．

日本語のあゆみ　目　次

Ⅰ

昔の日本語・今の日本語……五

現代国語の性格……三三

Ⅱ

紫式部は『源氏物語』をどう発音したか……四三

『平家物語』の言葉……五五

「荒海や」の句の文法……一〇一
——伊吹一氏の見解に対して——

江戸の言葉……一二三

私の『膝栗毛』鑑賞……一二六

Ⅲ
日本語の古い発音を伝えるもの――口承資料――……二三一
国語史と方言……二三八
Ⅳ
日本語の性格はどうしてできたか……二四九
『万葉集』の謎は英語でも解ける……二六五
Ⅴ
新村出博士の『国語学概説』……二七七
橋本進吉博士の生涯……二八六
清津の酒……三二七
三つの戒め……三三一
あとがき……三三七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

日本語のあゆみ

I

昔の日本語・今の日本語

昔の日本語は、今の日本語とどのようにちがっていたか。言葉を扱う場合、学者は、発音とか文法とか語彙とか、分野を分けて扱いますが、はじめに、日本語全般について、昔の日本語を眺めてみましょう。

今の日本語を全般的に見た場合、日本語というものは、いろいろな言語体系がいっしょになった言語だと言えます。しかし、昔の日本語は、今の日本語より、もっと複雑な組立てになっていたと思われます。

第一に共通語というようなものが普及していなかったこと、それだけ方言のちがいが激しかったこと、東条操氏の『全国方言辞典』というものを見ると、随分いろいろ珍しい言い方が各地にあることを教えられます。「きのうの晩」と言って、おとといの晩をさす地方が、福島・佐渡からはじまって、全国の二十一府県に亙ってありますが、今その地方に行っても誰もそういう使い方をしません。私が気がついた中では、香川県の西の方でたったひとり、そういう人を見つけただけでした。また、東京都の三多摩地区から埼玉県の入間郡にかけて、カマキリとトカゲの名称

が逆になっているということが、戦前からよく話題になっていましたが、今そういう地方に行っても、トカゲはトカゲ、カマキリはカマキリで、逆になど言いません。方言の差がなくなることは、方言学者には淋しいことですが、共通語が広まったことを、喜ぶべきなのでしょう。

このようなことを見るにつけても、昔は方言のちがいが激しかったと想像されます。

明治維新の時、薩摩・長州の武士と、津軽・秋田の武士と、共同して佐幕派の会津城などを攻める時、方言でやったのでは言葉が通ぜず、謡曲の言葉でやったというような話が伝わっています。謡曲でやったと言うと、

これは薩摩に住まい致すさむらいにて候。これより会津に向い、まつろわぬやからを討伐しようずるにて候……

というような言葉でしゃべったのでしょうか。もっともそれは誇張で、実際は、何か一つの単語がわからなくて、謡曲の単語で言ったら通じたというようなことがあったのかもしれませんが、とにかく使うべき共通語という言語体系はもっていなかったのでしょう。

こういう方言のちがいは、大昔はもっと激しかったと思います。戦国時代に日本に来たロドリゲスという神父は、日本の方言のちがいを書いていますが、博多地方では、「過分」をパブン、「菓子」をパシと訛るとか、肥前・肥後地方では、女子や、女子と話す男子は、感動助詞バオを使うとか言っていますが、今のそういう地方ではそういうことはありません。今よりも、そういう地方の言葉は、京都の方とのちがいが激しかったのではないでしょうか。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

奈良時代、関東の言葉は、東歌によって知られるとおり、大和の言葉とは随分ちがったものでした。東歌の言葉はそれでも、いくらか大和言葉化したもので——例えば、「筑波嶺に雪かも降らる」とありますが、ほかの例からすれば、「降らる」ではなくて「降らろ」だったろうと思われる——ちょうど今の八丈島の言葉が、東京の言葉とちがうように、当時の中央の言葉とちがっていたろうと思われます。

古い文献に、飛驒方言を特立しているものもあります。今、あまり特色のない飛驒地方の言葉もちがっていたのでしょうか。熊野地方の土蜘蛛や、九州の熊襲と呼ばれる人たちは、ちがった民族と言われていました。恐らく言葉も大きくちがっていたのでしょう。

方言のちがいが激しかったばかりでなく、身分・職業による言葉のちがいも激しかったと思われます。歌舞伎を見ていますと、武家・商人・僧侶・農民など、服装もちがいますが、言葉つきも大きくちがい、一言聞いただけでどういう身分の人かわかります。あれは多少誇張もあるでしょうが、実際にも相当なちがいがあったものと推定されます。

今、私どもが、テレビのノド自慢の番組に出て来て歌など歌う人を見ていて、何の職業かまずわかりません。昔はお寺の坊さんは頭を剃って衣を着ていたものですが、このごろでは、髪をのばし、ピンクのワイシャツなどを着て、ゴーゴーを踊ったりしていますので、ほんとうに区別が難しくなりました。

江戸時代、かごかきや馬方の言葉は乱暴なものときまっていました。明治になっても、車夫・

馬丁の徒は、行儀の悪い物言いをするものというのが定評でした。現代それに相当する職業は、町の流しのタクシーの運転手諸氏ですが、中には乱暴な物言いをする人もありますが、全体としては、随分品がよくなったではありませんか。

芝居で見ていますと、江戸時代、武家の言うことが長屋の人間にわからなくて、大家に通訳してもらっている場面があります。落語の「垂乳根」には、貴族の家に奉公していた女性の言葉が、彼女と結婚した大工の八つぁんには全然通じないところがあります。

漁師の言葉がちがっていたのは、古くから有名で、「あまのさえずり」と言っていました。

次に男と女の言葉のちがい。これは終戦後、男女共学になってちがいが少なくなったというのが定説です。たしかに、明治・大正のころはちがいが大きかったですし、江戸時代の歌舞伎の舞台などで、男と女ははっきりちがった言葉でしゃべっています。しかし、このちがいがはっきりしはじめたのは、鎌倉時代で、男はソーローと言い、女がサブローといったあたりから、男らしい言葉づかいと女らしい言葉づかいが出来たものです。

平安朝時代では、『源氏物語』などで、どれが男の言葉か、どれが女の言葉かよくわかりません。男は「行くな」と言い、女は「な行きそ」と言ったというような傾向はありますが、あまりはっきりはしません。ただし、それは話し言葉の方で、書き言葉になりますと、男は漢字を並べて漢文体あるいは漢文体まがいの書き方をしたのに対して、女は平仮名を用い、やまと言葉を連ねて書きましたから、そのちがいは現代とは比べものにならないくらいちがっていました。紀貫

之が『土左日記』を和文体で書きたかった、それで女のふりをして書いたのは、男はああいう文体で文章を書くことがなかったからです。

最後に、文体のちがいというものがあります。

今は大体口語体一本ですが、戦前は口語体と文語体という対立があって、文語体の方がむしろ正式な日本語だという考えがありました。明治時代、文語を「普通語」と言い、口語は「俗語」と呼ばれていました。法律とか、詔勅の類の文章は全部文語でしたし、正式の書簡は「候文」と呼ばれる、一種の文語体で書かれました。一般の人は文語体を勉強しないではいられなかったわけです。戦後は、文語体は和歌や俳句に用いられるのが主な使い途になって、随分影の薄いものになってしまいました。

口語体・文語体の対立は、鎌倉時代以後のもので、平安朝時代は言文一致だったというようなことがよく言われますが、それは『源氏物語』や『枕草子』のような女流文学が口語体で書かれていること、『古今集』のような和歌が当時の口語体で詠まれていたことを言うもので、男の書く文章はさっき述べたような漢文または漢文まがいの文章でした。男の書くものの方が正式と考えられていましたから、この時代はやかましく言うと、今以上にはっきりした言文二途の時代だったと言えます。奈良時代はますますそうですから、文体の統一は今日が一番であると言うべきかもしれません。

発音の面では

現代の方が、昔に比べて、音の単位――音節の数も多く充実しています。と言うと、それは当然だ、時代が進めば、発音だって複雑になるだろうと思われるかもしれません。しかし、これは簡単に考えてはいけません。人間というのはなまけ根性のもので、特に自然のままにしておきますと、発音の単位はどんどん少なくなってしまうものです。中国の北京官話などは、もとのキとチ、シとヒがいっしょ、清音と濁音の区別がなくなり、「一」と「億」が同じ発音になり、「山西省」と「陝西省」が同じ発音になっていますが、これらは以前別の発音でした。

日本でも、地方に行きますと、中央で区別されている音がいっしょになっているものが多い。奥羽地方や飛んで出雲地方で、シとスとシュがいっしょになり、ジとズとジュがいっしょになっているのは有名です。九州の鹿児島地方では、「口」も「靴」も「釘」も「首」もクッという同じ発音になり、「国」と「組」はクンという同じ発音になっていることで知られています。沖縄地方はなお混同が激しく、eの母音がiの母音といっしょになり、oの母音とuの母音がいっしょになっています。これらは、いずれもめんどうな区別はやめてしまおうという気持の現れです。中央でもしたがって、「ゐ」と「い」、「ゑ」と「え」、「を」と「お」がいっしょになってしまいましたし、「じ」と「ぢ」、「ず」と「づ」もいっしょになってしまいました。

では、どうして音が殖えたのか。それは外国と交際が盛んになると、外国語が外来語として入

って来る。その時、新しい発音もいっしょに入ってくるのです。今、英語全盛の世の中ですので、ファンのファ、フィルムのフィ、あるいは、ピー・ティー・エイのティ、ディーゼル・エンジンのディなどが日本語の中に入って来ました。日本では昔、大和時代から平安朝時代のはじめにかけて、中国の文化が盛んに入って来ましたが、それは今日欧米の文化が入ってくるどころの騒ぎではありません。そこで、中国語の単語といっしょに発音のくせがたくさん入って来ました。キャ・シャ・チャ……のような拗音がそれです。ハネル音・ツメル音も入って来ました。『万葉集』などにはそのような発音がまだありませんで、「東の野にかぎろひの……」という歌など、今はヒンガシノ……と読んでいますが、『万葉集』の出来たころはヒムカシノ……と読んでいたに相違ありません。

発音の一種であるアクセントは、昔に比べて今の方が簡単です。平安朝時代は、「紙」と「髪」、「鞍」と「倉」などちがったアクセントをもっていたことが、文献によってわかりますが、今では標準語でも京阪語でも、区別がありません。アクセントは外国語が入ってきても、その影響を受けなかったために、複雑になることがなかったからでしょう。

発音に関してもう一つ、言葉全体の速さですが、これは昔はのんびりしていたので、言葉全体がゆっくりしていたと思われます。なんでそれがわかるかと言いますと、今は、「示す」とか「率いる」とかいう言葉は、シメスとかヒキイルというアクセントで一語ですが、平安朝時代のアクセントを調べてみますと、シメスゥとか、フィキヰルというように、二語のようなアクセントで

す。また、「百合」とか「胡麻」とかいう言葉は、当時、ユウリ、ゴオマのような、一音節の途中で音が高く変化するアクセントをもっていました。これは当時の発音のスピードがおそかったから、そういう言い方ができたのだと思います。

文字の面で

この分野では、現代語は昔に比べて非常に進化したと言えます。

奈良時代ごろまでは、漢字しかありませんでした。これは書くのに不便だったほかに、読むのにも不便でした。

東野炎立所見而　反見為者月西度

この歌は「ヒムカシノノニカギロヒノ……」と読んでいますが、こう読んだのは、賀茂真淵によるもので、その前は「ハルノノニケブリノタテルトコロミテ……」と読んだりしていました。たしかに、いろいろな読み方ができそうです。今、真淵の読み方が定説になっていますが、はたしてこれに疑いはかからないでしょうか。

私は一か所満足していないところがあります。最後の一句です。一般には「ツキカタブキヌ」と読んでいますが、私はここは「ツキカタブケリ」ではないかと思います。「ツキカタブキヌ」では、私が振り向くまでは月は中天にかかっていた、私が振り向いた途端に月がスーッと西の方に沈んで行った意味になると思いますが、そんなばかな話はありません。振り向いた時、すでに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com